

甘いもの好きには

登場人物

茜（あかね）…女。十六歳。早坂グループの社長。

蒼真（そうま）…男。オネエ。声は甲高い。二十六歳

敦（あつし）…男。カフェ店員。二十一歳

黒斗（こくと）…男。茜の父親。六十二歳

白月（はづき）…女。茜の秘書。二十五歳

○ シーン 1 道

通行人のスマホにニュースサイトが写っている『早坂グループの若き社長の素顔に迫る。早坂「こう見えて甘い物大好きなんです」』

茜、ケーキの箱を片手に歩いている
蒼真、茜の向かい側の歩道で崩れたケーキを前にオネエ座りで座り込んでベソベソと泣いている

茜「声をかけたのはたまたまだった」

ふと足をとめる茜

茜、道路越しに蒼真を見つめる

茜「大の男がケーキを落としてベソベソ泣いているのを見て、なんだか可哀想になったからだ」

信号を渡って蒼真の元にたどり着き、蒼真の肩をトントンと叩く茜

茜「あの、私もそのケーキ買ったんですけど半分こします？」

顔を上げる蒼真

ぱあああっと顔が華やぐ蒼真

蒼真「いいの？本当に？」

にこりと笑う茜

茜「はい。一人じゃ食べきれないと思ってた

ので」

立ち上がって茜の手をとりブンブンと振

る蒼真

蒼真「ありがとう：本当にありがとう！」

蒼真「それなら持ち込みオツケーのカフェあ

るからそこに行かない？」

茜、微笑む

茜「そうしましょうか」

○シーン2 カフェ colors テーブル席

二人席のテーブルに座る蒼真と茜

敦、二人のオーダーをとっている

蒼真「アメリカン一つ。あなたは？」

茜「えーっと。アイステイーで」

敦、オーダーのメモをとる

敦「かしこまりましたあ」

敦、一礼して厨房へ引っ込む

それを目で追う蒼真

蒼真「ほんつとうにありがとうね！このパ
テイスリー―出店するの十年に一度とかで
しよう？始発で並んで手に入れたのに落
とした時は世界が終わったかと思った
わ！」

茜「本当に世界が終わりそうな顔だったので
思わず声をかけちゃいました笑」

蒼真「やっぱり傍から見てもそんな感じだっ
たのねえ。本当にありがとう。あーつと
：
：
」

茜「ああ。茜です」

蒼真「茜さん！あなたは命の恩人よ！あたし
は蒼真っていうの！よろしくね！」

茜、微笑む

茜「はい、よろしくお願いします」

蒼真「あら、そういうえばあなた、学校は？見
たところ学生さん？よね？」

気まずそうな顔をする茜

茜「えーっと」

ハツとする蒼真

蒼真「いいのよ！言いたくないなら言わない

で！私も学校をサボってしよっちゅうお

父さんに怒られてたわぁ」

茜「お父さん、厳しいんですか？」

蒼真「めーーっっちゃくちゃに厳しかったわ

よ！」

机をバシバシと叩く蒼真

蒼真「男でその口調は気持ちが悪いだのなん

だの終いには甘いものを男が食うなんて

軟弱だから食べるなんて言うのよ！？」

蒼真「信じらんないわよね！」

敦「お待たせしました」

二人、一斉に敦を見る

敦「うわ気まず。お話盛り上がっているところ

ろ失礼致します」

敦「アメリカンと」

敦、蒼真の前にコーヒーを置く

手で会釈する蒼真

敦「アイステイ！です」

敦、茜の前にアイステイ！を置く

目を合わせずに会釈する茜

敦、首をかしげながら茜を数秒見る

敦「ご注文は以上でよろしいでしょうか」

蒼真「ええ。ありがとうございます」

敦「失礼します」

会釈して立ち去る敦

蒼真「さあ！食べましょうか！」

蒼真、茜、手を合わせる

蒼真と茜「いただきます」

蒼真と茜、一口食べる

蒼真、ほっぺを抑える

蒼真「おいいしい！ホントアタシ運がいい

わ！」

茜、微笑んでいる

茜「よかったですね」

蒼真「それもこれもあなたのおかげよ！」

茜「いえいえ、そんなことは」

二人、しばらく談笑している

そのままフェードアウト

○カフェ colors テーブル席 二時間後

空になったお皿

蒼真「はー食べた食べた。おいしかったわね」

茜「本当に」

蒼真、ふいに立ち上がる

蒼真「ちょっと待っててね」

茜、きよんとする

茜「わかりました」

蒼真、伝票を持ってレジに行く

茜「え」

茜、急いで支度をする

○カフェ colors レジ 同

蒼真「すみません。お会計で」

敦、奥から出てくる

敦「はいはい」

敦、レジをうつ

敦 「合計 1200 円です」

茜 、走ってくる

茜 「すみません！大丈夫です！」

蒼真 「あら、いいのよ。ケーキご馳走になっ

たし」

茜 「でも」

蒼真 「いいの！私がお礼におごりたいの！

大人しく受け取んなさい！」

敦 「そうですよ。じゃないと俺がもらっちゃ

いますよ」

茜 、押し黙る

茜 、微笑む

茜 「分かりました。では、お言葉に甘えます」

蒼真 「そうこなくっちゃ」

敦 、お会計をする

敦 「あい、まいどありい！」

蒼真 「ありがとうね」

蒼真 と茜 、店を出ていく

蒼真 「ご馳走でした。ありがとうね」

茜 「ご、ご馳走さまでした」

敦「あいよ！また来てね」

○カフェ colors 前

蒼真「いやーおいしかった！ありがとうね茜ちゃん」

茜「こちらこそありがとうございます」

蒼真と茜、逆方向に歩いて行く

蒼真、手をふる

蒼真「じゃあね！」

茜「はい、また機会があれば」

○早坂グループ本社

茜、入ってくる

白月（25）「お疲れ様です。楽しめましたか」

茜「ええ、とても」

白月「それはよかった。午後からの予定は15時から2時間ほど定例会議。15時半からスポンサーと折衝」

茜「今回の協賛企業は」

白月「大本グループです」

茜「じゃあ時間長めに見た方がいいね」

白月「ごもつとも。そのため3時間ほど見て
おります」

茜「了解」

茜「そこから3時間くらいで午前の書類片
付けて、そこから午後の書類かな」

茜「ため息」

茜「今日、何時に眠れるかな」

白月「午前は休んだ分、午後は頑張るよう
に
とのことです」

白月、エレベーターのボタンを押す

茜「お父様から？」

白月「ええ」

茜「よし、頑張ります」

茜と白月、エレベーターに乗る

○蒼真の家 リビング

蒼真、コーヒー片手にスキップ

蒼真「いや、いいことあったわぁ」

蒼真、テレビをつける

蒼真「今日のZAPは綾野剛が出てくるから録

画してたのよね！」

蒼真、ZAPを見始める

蒼真、コーヒーを飲む

蒼真、テレビに手を振る

蒼真「きゃ、剛様♡こっちむいて♡」

綾野剛、笑顔で喋っている

蒼真「きゃ♡♡」

テレビ「続いて、今話題の若手社長にインタ

ビューを」

蒼真「はー眼福眼福。ほんっと綾野剛ってい

い男！」

テレビに茜が映る

蒼真、コーヒーを飲もうとして手が止

まる

蒼真「それから彼女と会うことなく、4ヶ月ほどが経った」

○早坂グループ 社長室 夜

茜、扉をノックする

黒斗（忍）「いいぞ」

茜「失礼します」

茜、入ってくる

茜「こちら、本日の報告書です」

黒斗「ご苦労」

黒斗、報告書を読む

黒斗「何故、原産業を切らなかったんだ。あ

そこはもうじき潰れると言っただろう」

茜「あそこにはお世話になっているので、今回は見送りました」

黒斗「甘いな。勝手な行動をするなど言って

いるだろう」

茜「申し訳ありません」

黒斗、ため息

黒斗「もういい。出ていけ」

茜「も、申し訳」

黒斗「いいから出ていけ！」

茜、泣きながら出ていく

黒斗、ため息

黒斗、電話をかける

黒斗「もしもし？俺だ。あの件、もう動き出
してくれ」

○カフェ colors

蒼真、来店

敦「らっしゅっせい！」

蒼真「相変わらず元気ね」

敦「うす！そっちこそすっかり常連っすね！」

蒼真「だってここ全部おいしいもの！」

敦「そいやあの子元気なんすか？あの社長っ

子」

蒼真「あらあなた知ってたの？」

敦「逆に知らなかったんすか？」

蒼真「会ったことなかったしねえ」

敦「そりゃ当たり前でしょ。んで、ご注文は」

蒼真「キャラメルマキアートの。あとリング

のタルト」

敦「うす！キャラメルとリングタルト一丁！」

敦、厨房に戻っていく

蒼真「なんで、ずっと接客が居酒屋なのかし

ら」

蒼真「社長業忙しいのに、あの日あのケ

キ買えたなんて」

蒼真、微笑む

蒼真「改めてだけど、よっぽど甘いもの好

きなね」

敦「お待たせしました、うわ。何一人でニヤつ

いてんすか」

蒼真「余計なお世話よ」

敦「リングのタルトと、キャラメルマキア

トです。ごゆっくり」

蒼真「ありがとう」

敦、厨房へ去る

蒼真、一口食べる

蒼真「うん。おいし♡」

蒼真「機会あれば、またあの子と食べてみ

たいものねえ」

○早坂グループ本社 玄関周り

茜、会社に戻ってくる

パトカーに取り囲まれている早坂グルー

プ

白月が声を張り上げて対応している

驚く茜

スマホニュースを見る茜

ニュースの通知「早坂グループ社長、横領の

疑い」

目を見開く茜

茜「私、そんなことしてない」

白月から LINE

白月「早くこの場から離れて下さい」

白月「私の事はいいですから」

茜「でも、置いてなんていけな」

茜の後ろに一般人が立っている

一般人「あれ、犯罪者じゃん」

驚いて振り向く茜

にやにやと笑う一般人

茜の腕を掴もうとする一般人

反射で避ける茜

そのまま路地走って逃げ出す

一般人「なんで逃げるんですかー？ やっぱり

心当たりがあるからですよねー？」

一般人「（呟く）これ俺一人で捕まえたら謝礼

金独り占めか」

一般人、茜を追いかけ始める

○蒼真の家 リビング

蒼真「ただいま」

蒼真、カバンを置き、コートをかける

蒼真、コーヒーを片手にソファに座る

蒼真、テレビをつける

ニュース速報「早坂カンパニー、社長横領か？」

蒼真、飲もうとしたコーヒーをこぼす

蒼真、目を見開く

蒼真「あの子が？」

蒼真「：あの子がそんなことするはずない」

蒼真、バックと鍵をもつ

蒼真、勢いよく家を出る

○路地裏

路地の奥の方へ追い詰められる茜

茜、息が上がっている

一般人「やっと追い詰めた」

一般人、ゆっくりと近づいてくる

一般人、微笑む

一般人「じゃあ、お兄さんと一緒に自首しに

行こうか」

茜「わ、私やってな」

一般人「つべこべ言ってるじゃねえよ犯罪者がよ！！！」

ビクツとする茜

蒼真「その子、横領なんてしてないわよ」

蒼真、一般人の後ろに腕を組んで立つ

茜「そ、そうまささん？」

一般人「あ？なんでそんなこと分かんだよ？」

蒼真、一般人と距離を詰める

蒼真「勘よ！！！」

蒼真、突然一般人の顎にアッパーを

かます

その場に倒れる一般人

茜、涙目

茜「なんで、こんなところに……」

にこりと微笑む蒼真

蒼真「友達を助けに来たの」

茜「私、やってないです」

蒼真「知ってるわよ。甘いもの好きに悪いや

つはないからね」

涙を流す茜

蒼真「ほら、まだゆっくり泣いてる暇はない

わ！行くわよ！」

茜の手を引いて走り出す蒼真

○早坂グループ 社長室

必死で書類をかき分けている白月

入ってくる黒斗

それを見て一瞬動きが固まる白月

白月「お疲れ様です」

黒斗「おうお疲れ」

黒斗「ああ、そうそう。社長室、もう立ち入

り禁止だから。」

白月「：何故ですか？」

にこりと笑う黒斗

黒斗「君は私にこれ以上言及するとうのか

い？」

白月「：いえ。失礼致します」

黒斗の横を通り、扉に手をかける白月

父「君はもの分かりがよくて助かるよ」

一礼して社長室を出ていく秘書

○社長室前廊下

廊下を歩く白月

白月「まあ、茜さんの無罪証明に必要なデータのほとんどは私のUSBに既に収集済みなんですけどね」

白月、USBを見つめる

白月「申し訳ありません。代表。私を捨て下さって感謝しています」

白月「でも、私は茜さんがあんなことをするとはどうしても思えない。」

白月の後ろ姿

白月「私は今日初めてあなたに背きます」

○道

とりあえず路地裏に身を隠す蒼真と茜
二人とも息があがっている

蒼真「変装するにも情報が出回るのが早すぎる！」

スマホをチラ見する蒼真

蒼真「茜を捕まえたら懸賞金が出るなんて噂もまわってる」

蒼真「あの一般人が茜の今日の写真をSNSに上げたことによって少しでも大通りに出たら見つかってしまう」

蒼真のスマホに表示されたSNSの投稿には茜の写真とこの文章がのっている「こいつ捕まえたら懸賞金でるらしい」

苦虫を噛み潰したような顔をする蒼真

蒼真「何かいい策はないものかしら……」

モブ1「いたぞ……っ！！」

ビクツとする蒼真

蒼真「逃げるわよ！！」

ぼ……っとしている茜

蒼真「茜！！茜！！」

ハッとする茜

蒼真「早く！！逃げるわよ！！」

茜の手を引いて逃げ出す蒼真

よろよろとついていく茜

蒼真 ㄋ 「まあ、こんな状況、この年で、よくもってる方だわ」

一般人が5人程追いかけてくる。あと、カメラとかマイク持ったマスコミも何人くらい。

走る蒼真と茜

蒼真 ㄋ 「ダメね：私の体力はまだもつけど、」

茜の方を見る蒼真

蒼真 ㄋ 「茜の体力がもたない」

蒼真 ㄋ 「抱えて走り続けられる訳でもなし、私ができるだけこいつらを引き止めて：」

警官 1 「待ちなさい！！！」

目を見開く蒼真

蒼真 「警察！？」

後ろの警官 1 に叫ぶ蒼真

蒼真 「まだ証拠不十分なんじゃないの！？さっきの今でしょ！？それとも犯してもい

ない罪で現行犯逮捕するつもり？！」

蒼真、前に向き直り路地の右から他の警官が走って追ってきていることを目視して左に曲がる

不敵に笑う警官1

警官1「ある筋からタレコミがあったんだそうだ。それで早坂茜の罪は確定。それ以上そいつを庇うならお前も犯罪者になるが？」

蒼真、茜がなにか言おうとするのを腕で制止して叫ぶ

蒼真「望むところよ！！！！」

茜「蒼真さん、もう、もういいよ。私が大人しく捕まれば済む話でしょ？」

蒼真「それで済まないのはあなたも薄々気づいてるでしょ？」

蒼真「あんな冤罪堂々とテレビで発表させるなんて、よっぽどの馬鹿か、もしくは」

苦虫を噛み潰したような顔をする蒼真

蒼真「よっぽど全てをもみ消せる自信があるかのどっちかでしょう？」

怯えた顔をする茜

大通りに追いやられた二人

一斉に二人を見る通行人

人混みに紛れようとする二人

通行人「あ！早坂茜だ！」

めっちゃ写真撮る通行人たち

蒼真「やめなさい！！！」

誹謗中傷と共にネットにあげられるた

くさんの茜の写真

蒼真「この子は、茜は、どれだけ人に傷つ

けられればいいの！」

パトカーが数台追いかけてくる。警官2

と3が乗っている

警官2「君たち！！止まちなさい！！！」

二人の先回りをするパトカー

前からもパトカーを降りてきた警官が距

離を詰めてくる

急停止する蒼真、茜

後ろを振り返る二人

たくさんの人が追ってきている

前を向き直る二人

警官が距離をつめてきている

蒼真「：どうしまししょう。このままじゃ：」

突然二人の後ろからすごいエンジン音

と共にリムジンが現れる

驚く一同

リムジン、蒼真と茜の前で止まる

警官1が血相を変えて叫ぶ

警官1「そのリムジンに乗らせるな！逃げる

つもりだ！」

蒼真と茜、運転席を見てぽかんとする

？？？「早く！！乗って！！！」

心人、ハツとして乗り込む

急発射するリムジン

警官1「早く！！パトカーで追え！！！」

急いでパトカーに乗り込み追う警官2

と3

○リムジンの中

後頭部座席で息が上がっている茜と蒼真

蒼真「なん：であなたが：？」

茜「店員さん：」

運転席で敦、ドヤ顔

敦「いや、ニュース見た時にあの人ぜってー
こんなことしねえなって思ってた！」

敦、思いっきりハンドルを切る

茜と蒼真、右方向に身体が倒れる

敦「それなら助けねえと！！って思ってた！」

茜「うゝ疑うとかはしなかったんですか？」

敦「え？でもあなたはしないでしょ？そんな

こと」

茜「ほんとになんの根拠もないのにリムジン
で助けに来たんですか？」

涙を流す茜

茜「バカじゃん：」

蒼真「あなたが馬鹿でよかったわホント」

店員「褒めてます？けなしてます？」

目の前にパトカーが出てくる

店員「うおっ」

蒼真、野太い声で叫ぶ

蒼真「う＝お＝お＝お＝お＝お＝お＝お＝お＝」

びくっとして蒼真を見る茜

敦「ああああああっ！！」

リムジンでドリフトしてパトカーをかわ

す敦

蒼真「リムジンでドリフトって出来るのね」

敦「声、野太いんですね」

蒼真「うるさい」

茜、堪えきれずに手で口を抑えて笑う

蒼真、それをじっと見る

茜「ごっごめん：ふふっ」

蒼真、微笑む

蒼真「いや、あなたが笑ってくれたならそれ

でいいわ」

敦「てかどうしますか？どっかあてはあるん

すか？」

考え込む二人

蒼真「どうしましょーう……」

突然鳴るあかねの電話

ビクツとする三人

秘書からの着信

迷いなく出る茜

聞き耳をたてる蒼真と敦

茜「もしもし」

白月「大丈夫ですか？茜様」

茜「大丈夫です。……あの場に置き去りにして
ごめ」

白月「そんなことはどうでもいいんです。あ
なたが無事ならそれでいい」

涙目の茜

白月「今から大事なことを話します。よく聞
いてください」

茜「う、うん」

白月「今回のことに関してです。薄々は気づ
いていると思います。が黒幕は……」

黙り込む白月

茜「お父さん、ですよ。ね。私の」

白月「：はい。恐らくは」

白月「ですので私は今から裏切ります」

茜「え？」

白月「あなたを大人の悪意に巻き込みたくな
いので」

タクシーの中で電話をしながらパソコ
ンを打つ白月

白月「あなたの無罪の証拠はほぼ揃いました。
ですが、お父様の不正の決定打がない
のです」

白月「そして、その資料は恐らく」

茜、白月「社長室にある」

敦、カーナビになにか打ち込み始める

白月「その通りです」

茜「分かった。向かうよ」

白月「いえ、そんな簡単な話ではありません」

白月「今、会社は人っ子ひとりおらず封鎖さ
れてはいますが、会社の周りはマスコミ
や警察がウロウロしています」

白月「ですから」

カーナビ「実際の交通規制に従って：

蒼真「あれそれ目的地って」

敦「早坂グループっすね」

蒼真「まさか」

白月「くれぐれも目立った行動は」

蒼真「突っ込むつもり！？リムジンで！？」

白月「：：なんだかそれは無理そうなので、
せめて、ご無事でいて下さい」

白月「私はデータをまとめて待っております
ので」

タクシーからおりてネカフェにはいる白
月

茜「分かりました！ありがとうございます！！」

電話を切る茜

敦「じゃあ行きましようか！！」

にっこり笑う敦

アクセルをベタ踏みする敦

リムジン、突如としてもものすごいスピー
ドになる

蒼真「イヤー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ッ」

敦「このまま突っ込むっすよ！！」

蒼真「え？玄関前で私たちだけそっと下ろす

とかいう発想は？」

敦「あ」

蒼真「は？」

茜「え？」

勢いよく玄関の自動ドアを突き破るリム

ジン

ガラスが粉々に砕け散る

敦「イエエエエエエエエ！！」

蒼真「イヤー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！」

茜「ああああああああ！！！！」

茜乙「こういうのって経費で落とせるのかな」

敦、リムジンのアクセルは踏みっぱなし

敦「オラオラオラア」

茜「いやもう人いないしここで」

エスカレーターもリムジンで無理やり駆

け上がる

店員「うおおおおおおおおお」

茜「あああああああああ」

茜「：経費で、どうにかして経費で落とすよ」

少し沈黙

マスコミや警官が玄関からドヤドヤと入ってくる

蒼真「はやく！行きましたよ！社長室に！」

茜「はい！」

敦「うす！」

蒼真「あんたも来るのか……」

敦「うす！」

茜、蒼真、店員の順番でエスカレーターをか
け上がる3人

○社長室

ドアが開く

茜が社長室を恐る恐る半身で覗く

社長室の中央に立っている茜の父

蒼真が怒りの表情で社長室の中へ出殴
り込みに行こうとする

それを制止する茜

茜「2人だけで、話をさせて欲しい」

蒼真、少し黙ったあと頷く

蒼真「分かった」

茜、社長室の中に入る

こっそりと鍵を閉める茜

茜「もうこれ以上、2人に迷惑を掛けたくない。

店員さんは顔を見られてないし、蒼

真さんは私が脅して協力させた事にすれ

ばいい。」

ドア前で待機する蒼真と敦

茜「これで、被害を被るのは私一人だけで済

む」

蒼真「マスコミや警官にはこころへん一帯

には立ち入れない。専用のカードキ

ーが必要だから。だから」

真剣な表情で父を見つめる茜

蒼真「時間かかってもいいから、ちゃんと言

いたいこというのよ！茜！」

ドアに聞き耳を立てる店員と蒼真

茜「おとうさ」

黒斗「君は、昔から賢い子だった」

花瓶にいけてある花を見て撫でながら

喋る黒斗

黒斗「幼ながらに上下関係を理解できた上に聞き分けが良かった。」

黒斗「故に」

黒斗、触っていた花をへし折る

黒斗「扱いやすかった」

目を見開く蒼真、茜

黒斗「君以上の駒はなかったよ」

○早坂グループ 社長室前

怒りのままにドアを開けようとするがあ

かない事に気づく蒼真

焦る蒼真と敦

敦、ピッキングを始める

蒼真「どこでそんなこと覚えてくるのよ…」

○早坂グループ 社長室

黒斗「でも、今日でその役目は終わりだ」

○早坂グループ 社長室前

敦「開いたら中は任せます」

蒼真「あんたは？」

○早坂グループ 社長室

黒斗「君は少しものを知りすぎた。知らなくていいことまで」

○早坂グループ 社長室前

ピッキングをしながらやける敦

敦「ちよっとやることあるんで」

○早坂グループ 社長室

黒斗「折角わざわざ養子まで引き取って育てたというのに」

シヨツクな表情の茜

茜「え：？」

黒斗「あ？知らなかったのかね？君もまだまだだね」

茜「だってお父さんそんなこと一度も：」

黒斗「お父さんだなんて呼ぶんじゃない！全くもって不愉快だ」

ビクツとする茜

黒斗「言うことを聞かない、出来の悪い兄貴がいた事は何度か話したな？」

黒斗「そいつを捨てたから代わりが必要になつたんだ」

黒斗「賢くて、言うことを聞きやすい、駒がへナへナとその場に座り込む茜

茜「元々、お父さんは、私の事なんて」

黒斗「あいつは言うことは聞かなかつたが、優秀だった」

黒斗「だが、言うことを聞けなければあいつの生きている価値なんてない」

黒斗「なあ？君は元々聞き分けの良い子だったのに。余計なことをするからだ」

黒斗「まあ、いい。ここまで喋ってしまったらあとはどうなるか分かってるな？」

ナイフを取り出す黒斗

腰が抜けて俯いたままショックで動けない茜

茜、そのまま涙を流す

黒斗、しゃがんでナイフを茜に向ける

黒斗「お前は最初から最後まで愛されない奴だった」

黒斗、ナイフで茜の心臓を刺そうとす

る

黒斗「かわいそうに」

茜の心臓の手前でナイフが止まる

茜がナイフを見ると血まみれでナイフを握っている手がある

蒼真、茜の背後にしゃがみこみ、ナイフを握って止める

蒼真「生きてる価値があなたの言う事を聞か聞かないかで決まるだなんて、ほんつつつとう馬鹿なこと」

蒼真「ねえ、そう思わない？」

蒼真「クソ親父」

苦虫を噛み潰したような表情の黒斗

黒斗「やはりお前も消しておくべきだった。

第七十三代早坂グループ元総帥」

にやりと笑う蒼真

黒斗「早坂蒼真！！」

茜「蒼真……さん？」

微笑む蒼真

蒼真「黙っててごめんね。茜」

黒斗「お前……茜がお前の妹だと知って俺を潰す為にわざと近づいたのか！」

蒼真「いや私そこまで策略家じゃないわよ」

蒼真「あの日の出会いは本当に偶然だったの。だからもう一生会うことはないと思ってた」

蒼真、ナイフを取り上げて横に投げる

父を真っ直ぐ見つめる蒼真

蒼真「昔っからあんたはいつつもそうね。自

分の価値観以外は全部間違ってるって

押し付けて！！！」

黒斗「だってそうだろう？大人のいうことを

聞けない子供なんていないじゃない

か」

蒼真、黒斗の胸ぐらをつかむ

蒼真「子供に辛い思いさせて！無理やり抱え

させて！この歳で我慢して笑うことを

覚えさせるんじゃないわよ！」

蒼真「そんなの親じゃないわ！」

思わず涙目になる茜

突然パァンと破裂音がすると共に蒼真

が倒れる

驚いて蒼真を見る茜

茜「蒼真さん！？」

黒斗に振り返り直る茜

銃をこちらへ向けている黒斗

銃からは煙が出ている

目を見開き驚く茜。言葉が出ない

黒斗「うるさい。ゴミが喋るんじゃない」

茜、息を荒らげて黒斗に殴りかかる

茜「殺してやる！」

それをなんとなく横に思いっきり倒して

かわす黒斗

全身を打ちつけて痛がる茜

茜「ううっ！」

蒼真に歩いて近づく黒斗

しゃがみこんで蒼真の髪を持って頭を

持ち上げる黒斗

突然蒼真が目を覚まし黒斗の持つ銃を

蹴りあげる

飛んでいく銃

黒斗を押し倒して落ちていたナイフを黒

斗の首にあてる

驚く茜と黒斗

蒼真「これで逆転ね」

茜「蒼真さん！！」

黒斗「な、なぜ心臓を銃で撃たれて無事なんだ？」

蒼真「胸ポケットに入ってた CHELSEA が」

蒼真、CHELSEA の箱を取り出す

CHELSEA の箱に弾丸がめり込んでいる

茜「胸ポケットに入ってた CHELSEA が？！」

茜「え？あのお菓子の？お菓子の CHELSEA？」

茜「え、CHELSEA ってそんな硬かったっけ？」

蒼真「そうよ！CHELSEA を舐めないで頂戴！」

茜「CHELSEA は舐めるものでは」

少しの沈黙

騒ぎ声が下の方から聞こえる

茜のスマホに通知がなる

スマホを見る茜

「早坂グループ社長。罪は冤罪か。新たな容疑者は総帥、早坂黒斗」

○ ネットカフェ

パソコンを睨んでいる白月

白月、溜息をつく

ふりかえる白月

白月「うまくいったようですね」

白月「まったく。どこでそんな技術身に着けてくるんですか」

白月「敦さん」

微笑む敦

敦「俺は昔っから手癖わるいからなあ」

白月「まあ確かにそうでしたけど、そんなレベルじゃないでしょう」

○早坂グループ 社長室

スマホをのぞき込んで驚く茜

○ネットカフェ

白月「国営のニュースサイトをハッキングして乗っ取って無実を証明する記事を書かせるなんて」

白月「下手したら捕まりますよ」

敦「でもあの子は無実なんだろう？」

白月「そうですよ！」

敦「じゃあ俺らなんも悪いことしてなくな

い？」

敦「俺は君が集めた事実を広める手助けをしただけだ」

白月、溜息をつく

白月「まあ今回はそういうことにしておきましょう。実際救われたのも事実ですし」

敦「そゆことそゆこと」

白月「ただし今度こんな危ないことしたら寝室分けますからね」

手を合わせて懇願する敦

敦「それはご勘弁を」

○早坂グループ 社長室

蒼真、自分のスマホを見る

目を丸くして驚いたあと、黒斗にスマ

ホの画面を見せる

蒼真「これであなたも終わりね」

黒斗、大きく溜息をつく

黒斗「私もここまでか」

黒斗、茜を見る

黒斗「お前さえ言うことを聞いていればよかったんだ」

蒼真「あのね。まだわからないの？」

蒼真「いい子かいいい子じゃないかは聞き分けの良さなんかじゃ決まらないわよ」

蒼真「いっかい檻の中で頭を冷やして、精々大切なものの本質くらいは見極められるようになりなさい」

黒斗、沈黙

茜「ごめんね。お父様。聞き分けが悪い娘で」

黒斗「何故だ：何故なんだ茜。昔はあんなに聞き分けが良かったのに。」

茜「もう人の顔色だけ伺って過ごしたくないの」

茜「あとお父様ごめんなさいお父様のリムジンぶっ壊れて動かなくなっちゃいました：」

黒斗「それは本当に何故なんだ茜！」

パトカーのサイレントの音が聞こえる

黒斗「もうそろそろ時間だ」

蒼真「最後に何か言いたいことは？」

少し沈黙

黒斗「私は、間違っていたのか」

蒼真「ハッ。それに気づいたただけ幾分マシね」

○後日 カフェ colors

蒼真、コーヒーを飲んでいる

ドア、カラシカラシと音を立てる

蒼真、ドアの方を見る

蒼真「随分と遅かったじゃない？」

茜、笑っている

茜「ごめんって」

蒼真「あなたの驕りなら許すわ」

茜「はいはい」

敦、いそいそとオーダーを取りに来る

敦「へいらっしやい。ご注文は？」

蒼真「あなたはここを居酒屋にでもしたいの？」

茜、思わず笑う

茜「アイステイーください。以上で」

敦「あいよっ」

敦、厨房へもどっていく

敦「(大声で)アイステイー一丁！」

蒼真、コーヒーをすすする

白月「敦さん？」

敦「すいません」

白月「いい加減クビにしますよ」

蒼真「やっぱクビぎりぎりなんじゃない」

茜「そりゃそうでしょ」

蒼真「いやでも白月さん就職先見つかってよ

かったわね」

茜「伝手があるから大丈夫っていったけど

まさかここだとはね」

蒼真「白月さんが経営にまわってからもっと

儲かっているみたいだしね」

茜「よかったよねホントに」

蒼真、顔の前で手を組む

蒼真「はてさて茜さん？」

茜、カバンから箱を取り出す

茜「なあに？」

蒼真「もったいぶってないで早く食べましょ

うよ！」

茜、箱を開ける

蒼真「まあ！きれいなケーキ！」

茜「でしょ？頑張ったんだよ？手にいれるの」

白月、アイステイ丨をもってくる

白月「お待ちたせいたしました。アイステイ丨

です」

白月、茜の前にアイステイ丨をおく

茜「ありがとうございます」

白月「どうぞごゆっくり」

蒼真「ありがとうね。あの時は」

茜、白月を見る

白月、微笑む

白月「さて、何のことでしょう」

白月、その場から去る

蒼真「さあ、食べましょうか」

茜「そうだね」

蒼真と茜、手を合わせる

蒼真と茜「いただきます」

茜「甘いもの好きには」

茜「悪いやつはいない」

終